五十年来台湾研究の回顧

——文化人類学研究者としての歩みと願い——

陳　其　南
何　義　麟（整理）

若林正丈：本日は，日本台湾学会設立大会記念講演の講演者として台湾・国立芸術学院教授（当時）の陳其南先生を迎えております。まず，簡単に陳先生についてご紹介を申し上げます。陳其南先生は，1947年台湾南部の屏東県の生まれです。台湾大学で人類学の修士号を取った後，エール大学へ留学されまして，漢族の家族論の中の「房」という単位の研究に取り組み，国際的名声を博した博士論文［Fang and Chia-tsu: The Chinese Kinship System in Rural Taiwan, Ph. D. Dissertation, Yale University, 1984］を書き上げました。その後，中央研究院民族研究所の研究員を経て，香港の中文大学でご教鞭を取られました。陳先生は，台湾大学在学中の頃から，すでに戦後台湾研究の源流の一つと言われる「濁水渓大肚渓流域の総合研究計画」にも参加されており，八十年代の頃からは，歴史研究の方にも手をも染められておりました。そうした研究成果により，台湾移民社会の「土着化」というパースペクティブを提出されましたが，それをめぐり，一時論争が起こったこともありました。九十年代に入りましては，数年にわたって行政院文化建設委員会の副主任の職に就かれました。その間，文化人類学者としての経歴を生かして，「社区総体営造」というコンセプトを提出されました。「社区総体営造」は日本で言えば，村おこしや町づくりということです。七十年代日本の高度成長の結果，村や町の過疎化やコミュニティーの衰弱化が起こったことで，村おこしや町づくりが叫ばれた時代があったわけです。実際の状況はよくわかりませんが，八十年代の台湾にも同じような現象が起こりつつあると言われました。陳先生は日本のそういう現象と社会の対応に目を付けられまして，台湾で旗振り役を果たして，一種の伝道師のように「社区総体営造」というコミュニティの再生運動を提唱・推進してきたわけです。これから陳先生のご講演をいただきますが，通訳は松田康博会員にお願いします。

はじめに

若林先生のご紹介ありがとうございます。今回日本台湾学会設立大会に参加させていただき，古くからの友人と新しいパートーナにお目にかかることができ，大変に嬉しく思っております。この学会の設立は日本における台湾研究の新しい世代がすでに形成されているという印象を私に与えます。いわゆる新しい世代とは，一つには参加者の大多数が戦後生まれの若い人という意味もありますが，もう一つには新たな態度または学術的信念を以て台湾研究を始めていらっしゃるという意味もあります。若いと言えば，1947年生まれの私も戦後の若い世代と思っていましたが，ここに来ると，私の台湾研究歴はもうかなりベテランの部類に属していることを感じます。私の生まれた1947年は二・二八事件が起こった年ですので，台湾にとって大変重要な年です。したがって，1947年生まれの私たちは事件犠牲者の魂の生まれ変わりであるとよく言われました。今日の台湾研究における新しい世代の形成は，もしかすると1947年生まれの私たちが犠牲者の生まれ変わりであったと

同じような意味で，再生あるいは新しいスタートの意味を持っているかもしれません。

台湾研究の発展史を振り返ってみると，この研究分野には，昔から今日まで日本と台湾の双方にとって，依然として多くの不愉快あるいは非理性的な要素が入り込んでおります。したがって，この学会設立に際して，まず強調したいのは，台湾研究の中から非理性的要素を排除しなければならないということです。非理性的要素の大半は，政治問題から来たものだと思います。例えば，過去の日本植民地支配，日中・日台関係，中台の統一・独立問題などの問題は，学界における台湾研究の位置づけに大きな影響を及ぼしています。私は 1947 年生まれでありますので，植民地時代の経験はありません。また，私は日本語が得意な方ではありません。そのため，日本社会また歴史に対する認識は，ほとんど留学先のエール大学で英語の文化人類学や社会学の著書を通じて得られたもので，当然日本に対する物事の見方は西洋の学術的観点から影響されています。日本人の日本自身への見方はいろいろありますが，アメリカでは大半が近代化論を以て，日本を理解するということが特徴です。したがって，私は日本社会や歴史に対する年輩の台湾人の持っているコンプレックスを持っていませんし，日本人による独自の研究成果からは影響を受けておりません。

私の日本社会への認識に影響を与えているもう一つの要因は，日本人との接触です。最近，私は「社区」の再建に携わり，村おこし・町づくりに従事している日本人とのつきあいが頻繁になりましたが，彼らは大半がもともと台湾と何の関係もない人です。かつて若林先生は現在の台湾住民を台湾語人，中国語人，日本語人と分類する見方を提示したことがありますが，以上のような自分の経歴をみますと，果たして私は何語人に分類されるのか，自分でもわかりません。このような個人差の問題を別にして，全体から言えば，日本と台湾の間には植民地支配の関係がありまして，また台湾と中国の両岸関係も大変複雑な問題です。このような割っても割り切れない関係は，多少なりと現在の台湾研究に影響を及ぼしていると思います。

先月，私は交流協会主催のアジア青少年文化に関する討論会に参加しました。日本の文化は台湾やアジアにどのような影響を及ぼしているのかという問題が議論されました。この討論会には台湾の人文学専攻の学者だけではなく，日本や韓国の学者の参加者もいました。議論の中心は，なぜ小室哲哉や安室奈美恵の音楽がアジア各国で歓迎を受けたのかということでしたが，その結論としては，現在の若者文化は国家や国民の問題とあまり関係なく国境を越えていること，また生活と文化は必ずしも政治と関連しているとは限らないことなどが提出されました。考えてみると，学術も同じように，政治やイデオロギーと関係のないようになるべきだと思います。しかし，先ほどのシンポジウムでは年配の台湾人が依然として国交問題や政治問題の発言をなさいました。政治の影響は至る所に及んでいることを示すものであると思います。

日本ないし中国はどのようにこの台湾学会の設立を見ているのか，台湾はこの学会にどのような期待を持っているのかという問題がありますが，我々は年配の人のような重い負担を背負う必要がありません。今日の講演の課題は台湾研究の過去への反省と未来への展望ですが，以上のような問題点を考えながら，台湾研究の発展史を振り返ってみたいと思います。以下は文化人類学研究者としての私がまとめた台湾研究の歩みです。この回顧によって，台湾で我々の行ってきた台湾研究に対する皆様の理解が深まるよう願っています。また，お断りしておきますが，ここで述べたことは時間の制限で，とても簡略的・断片的な話になると思います。詳しい論述は中国文で発表した拙著をあわせてご参照ください。

一　1970年代以前の台湾研究

台湾ないし世界各地で台湾のことを話すとき，台湾人は皆エクサイティングします。まるで台湾の立法院と同じようです。これは先程申し上げましたように，理性と非理性との葛藤です。私は，この問題の深刻さをしばしば感じております。皆様も経験されたと思います。学術研究の環境を見ますと，台湾研究は未だに非理性の陰にひきずられていると言えましょう。そのため，私の最大の願いは台湾研究を通じて，台湾社会の理性化を促進することです。

ここでは台湾社会における非理性的な学術環境を自分の体験談として述べさせていただきます。1970年代以前の台湾史研究を見ますと，この時期はまさに暗黒の時代と言えるでしょう。その時の台湾史研究は，独自の分野ではなく，必ず中国史の枠組みの中に入れられていました。そのため，台湾史は必然的に中国史の大きな枠の中に消えてしまいました。台湾大学在学中の私は，楊雲萍という台湾史の先生の授業に出たことがありました。しかし，彼の一年間の授業は最初から最後まで鄭成功敗北までの歴史しか講義されませんでした。楊先生は台湾生まれ台湾育ちの古い世代の台湾人です。当時の政治状況の制約があるかもしれませんが，彼の台湾史授業を鄭成功の時代で終わらせてしまった一つの原因は，彼の専攻が明史であったことにあると思います。したがって，私たちの台湾史への理解は清の時代にさえ入れない状況でした。

幸いに，その時には，歴史学以外の他のディシプリンから台湾史研究を理解する道が残されていました。例えば，法学や社会学及び文化人類学などの研究では，とてもすばらしい業績が挙げられていました。その代表的研究者は，日本植民地統治時代の教育を受けた戴炎輝，陳紹馨，陳奇録らの台湾人学者ですが，彼らは台湾「郷村社会」の研究に取り組んでいました。しかし，彼らは台湾社会の研究に従事しながら，台湾研究者と自称することができません。例えば，陳紹馨先生は「台湾は中国社会研究の実験室である」と唱えることで，その学術研究の必要性をアピールするという形をとっていました。つまり，彼らは，台湾研究を一つの研究領域として独立したものと宣言することができませんでした。この時期の台湾研究の最大の問題点は，政治的な理由によってタブー視されたことで，完全に隠れた黒子の存在になっていたことにありました。

二　台湾社会研究の確立過程

次は，1970年代に現代的な社会科学的手法で展開された台湾研究の成果を紹介させていただきます。この時代の代表的な人物は，中央研究院民族研究所の李亦園，楊国枢，文崇一等です。彼らは中国大陸出身の学者で，「(台湾における) 社会科学の中国化」というプロジェクトを組み，台湾社会の研究に取り組んでいました。その結果，1972年『中国人的性格』という本が出版されました。研究計画の題目から見ると，その意図は台湾における社会科学研究を中国化させることだと誤解されがちですが，実際には，台湾社会を研究対象としつつ，社会科学理論の「本土化」を図ることにあります。なぜ台湾でやっていることを「中国化」と名付けたのかと奇怪に思う人もいるかもしれませんが，これが台湾研究の特殊性で，微妙なところです。

1970年代には，以上の「社会科学の中国化」という研究計画のほかに，本格的なもう一つの台湾社会研究として，1974年から開始された「濁水渓大肚渓流域学際的統合研究計画」があります。この研究計画をきっかけとして，本省人学者が育成され，台湾研究の領域や内容も，より充実化した

ものとなりました。参加者は主宰者の張光直教授（ハーバード大学）及び民族研究所の王崧興教授のほかに，当時台湾大学各大学院在学中の私と陳秋坤，林満紅の三人，また荘英章らの数人です。私の著書『台湾的伝統中国社会』（1987年，允晨出版者）もその時の研究の産物です。この著書には，まえがきとして「人類学家與台湾研究」を書いており，文化人類学研究と歴史研究との関連に触れ，「土著化」概念についても簡単な説明を加えました。中国大陸からの漢族の移民はもともと出身地の泉州人や漳州人ないし閩南人（福佬人），客家人というアイデンティティをもっていましたが，時間が経つとともに彼らのアイデンティティは変わり始めました。彼らは新たな定住地に自らをアイデンティファイし，例えば台南人や宜蘭人などの新しいアイデンティティを徐々に形成していきました。台湾社会の変容を説明するために，人類学の視点から辿り着いたのが土着化という言葉です。この説明概念は漢族移民の宗族関係や分類械闘を分析した上で，1975年頃に提出したものだったのですが，政治の分野での「本土化政策」を連想させ，すんなり学界に受け入れられませんでした。先ほどの若林先生の紹介にあったように，土着化論争を巻き起こす結果となったわけです。

私の土着化論と真っ正面から対立したのが，歴史学者の李国祁の「内地化」論です［「清代台湾社会的轉型」『中華学報』第5巻第2期，1978年7月，など］。李は，清朝末期の台湾社会は中国大陸の漢族社会と，ほぼ軌を一にするように変容していった点で，「内地化」と名付けられる変化をしていたと主張しています。そのほかに，1990年廈門大学の陳孔立も『清朝台湾移民社会研究』の著書で土着化への反論を提出しました。このような論争の内容については，ここで詳しく説明しませんが，ただ一つ強調したいのは，台湾では学術問題がしばしば政治的イデオロギー的論争に巻き込まれてしまうという問題が存在していることです。この土着化論争は，学術と政治とが絡み合って展開された典型的な例だといっていいでしょう［詳しくは，陳其南『傳統制度與社会意識的結構』允晨文化公司，台北，1998年，第九章参照］。

三　学術研究と政治理念との葛藤

「土着化」対「内地化」という論争を体験した後，私は早い段階から学術研究の政治的利用という問題に関心を持ち，このような問題の解消を試みました。1979年の美麗島事件の時，私はある新聞のコラムにおいて，教科書で讃えられた呉鳳という人の物語を取り上げ，この人物の神格化の過程を暴きました。統治者が自分の都合で呉鳳の物語を改竄した点を指摘することによって，政府側の宣伝が必ずしも事実ではないことを批判したかったのです。

呉鳳という人物の物語は非常に複雑な変容の過程を辿りました。原住民（台湾の先住民族）の口承においては，呉鳳という人物は原住民をだましたため，首狩りにされたということです。しかし，連横の『台湾通史』においては，この物語の内容を少し修正し，原住民の面倒を見ていた漢族の呉鳳が，犠牲となってしまったと美化したのです。日本統治期に入ると，呉鳳という人物をさらに美化する日本語の著作が多く出されました。私の理解によりますと，その物語の大筋は呉鳳が滅私奉公型役人の鏡であり，原住民の首狩りの悪習をやめさせるために犠牲となったというものです。こうして，呉鳳は模範的な人物として讃えられ，日本人の役人が台湾人の面倒を見る時のモデルと目され，教科書にも登場しました。

戦後，台湾に移ってきた国民党政府は，日本統治時代のものをできるだけ排除しようとしましたが，ただ呉鳳の物語だけは，これを排除しないばかりか，同じように教科書の教材として活用さえしました。呉鳳という物語の採用において，国民党政府は呉鳳を外省人官僚の模範にしようとする

考え方を持っていたのではないかとも推測されます。したがって，呉鳳の研究は歴史研究ではなく，イデオロギー問題の研究であるというのが正しいと思います。台湾の小学校の一つの教材にすぎない呉鳳の物語に，こんなに多くの問題点が含まれているとは誰も考えていなかったことでしょう。これは台湾研究にさまざまな未開の領域が残されていることを物語っています。

学者の我々は新聞における呉鳳という物語への批判を通じて，統治側の考え方を少しでも変えるよう努力しましたが，この目的は成功しませんでした。ところが，この批判は意外な波及効果があり，原住民の覚醒を促す結果となりました。批判の基本的な目標は呉鳳という物語を修正すべく，政府を動かすことでしたが，結局，原住民の覚醒によって，呉鳳の銅像が壊される結果となりました。統治側のイデオロギーはまったく変わっていません［呉鳳に関する陳氏の議論は，陳其南『文化結構與神話——文化的軌跡（上）』允晨文化公司，台北，1986年，所収の論稿を参照］。

呉鳳伝説から見ても，台湾社会には非常に複雑なエスニック関係の問題が存在していることがわかります。そのため，台湾社会の研究は決して中国研究の実験室ではありません。例えば，台湾の原住民は九代族ないし十族に分けられ，その内に極端な母系社会から極端な父系社会までさまざまな部族が存在しています。さらに，漢族においては客家系や閩南系及び外省人というエスニックな区別もあります。台湾社会は日本のような均質的な社会ではありませんので，豊かな研究素材が残されている知識の宝庫です。ところが，知識の宝庫であったにもかかわらず，台湾研究は依然としてイデオロギー上の制約から逃れることができません。戒厳令解除後，台湾研究はブームとなりましたが，知識の宝庫としてのメリットはまったく活用されず，イデオロギー問題や政治問題などが依然として前面に押し出されています。

戒厳令が解除される前，台湾における歴史研究においては「台湾民族論」がすでに提出され，また台湾史を国家史として見なすべきだという主張が唱えられていました。このような「民族国家」の史観は主として中国の統一論の影響を受け，統一論に対抗しながら，台湾の独立を求める政治理念であるといっていいでしょう。これらの言論は政治化の産物といってもよく，基本的に政治的な束縛から脱却していません。しかし，このような台湾をめぐる統一論と独立論は双方共に，いずれも「民族主義」に基づいた言説です。つまり，一つの民族が一つの国家を作るべきというロジックを共有しています。

いままでの台湾史研究においては，民族主義に基づいて書いた著書が少なくありません。例えば，副総統連戦の祖父にあたる連横の『台湾通史』は最も著名な作品です。この著書は大正時代に出版されたもので，当然台湾総督をはじめ，多くの日本人の高官まで，さまざまな祝辞が寄せられていました。中国史学の伝統から言えば，「通史」とは独立国の歴史書です。しかも『台湾通史』の第一章には，「建国記」と銘打ちされていました。連横がどのような目論見で『台湾通史』を書いたのかは知りませんが，大変興味深いことであります。「建国記」には台湾の「建国」過程が書かれておりますが，興味のある方は自分で読んでください。とても面白いものです。

戦後も民族主義に基づく台湾史の著作が次々と公刊されました。史明の『台湾人四百年史』（音羽書房，1962年）あるいは王育徳『台湾——その苦悶の歴史』（弘文堂，1964年）がその代表的なものです。戦後，第三世界では民族主義が盛んに唱えられましたから，民族主義的政治理念に基づいて台湾史を再解釈するのは決して突飛なことではありません。しかし，現在台湾の経済発展及び政治発展は，すでに民族主義的な国家史の段階を越えて，世界史の新たな発展段階に入り込んでいこうとしているわけですから，別の視点から台湾研究の将来の発展を展望しなければなりません。

四　国民国家と市民社会の変容

台湾研究を政治的イデオロギーの束縛から解き放つために，ここでは先ほど申し上げた一つの民族が一つの国家を作るべきとという「民族国家」のロジックを越えて，「市民社会」を最優先にする新しい「国民国家」の理念に基づいた台湾研究の将来と台湾問題の有り様を考えてみたいと思います。

今日の台湾では民族国家の理念に基づく中国との統一と独立をめぐる論争が繰り広げられていますが，今後の台湾社会では国家ないし中央政府の問題ばかりに関心を寄せるのではなく，逆に地方における生活向上問題に関心が集まるようになるものと思います。これは市民社会の新たな発展段階であると言えましょう。国民国家の存立根拠は，このような健全な市民社会の存在にあるのではないでしょうか。今日の台湾では地方一般の民衆の努力で健全な市民社会が形成されつつあると私は見ています。具体的に言いますと，私が従事している地方コミュニティーの活性化の「社区総体営造」という市民運動は，大いに地方民衆の歓迎を受けています。台湾の地方社会は現在の日本と同じように，自分の町や村の再生や地域生活の向上に取り組んでいます。このような市民社会の発展は，台湾の統一・独立論争を解消する一つの道筋になると思っております。

市民社会の理念に基づいて，今後の台日関係の発展を推進することも有益なことでしょう。これまでの台湾と日本の関係は，植民地支配関係の側面が強調され，帝国主義的侵略の問題として議論されてきました。しかしながら，これからの台湾と日本の関係においては青少年文化の波及，資本主義下で発生する社会問題の共通性等の問題が注目されるのでしょう。日本と台湾は，短期間の中に近代化が進められたため，多くの共通性を有しています。例えば，都市化や工業化の問題は，日本と台湾とで非常に似ていると思います。二，三百年の時間をかけて，近代化発展を遂げた欧米社会とは異なる社会問題があるのです。特に，台湾社会は三，四十年の期間内に圧縮されて近代化がなされたため，多くの社会的歪みが発生しました。このような社会問題は欧米とは性質を異にしており，日本との類似性を多く持っています。したがって，社会問題の解決や地方社会の発展の多くは，日本から学ぶことができると私は思っています。

以上述べたような市民社会の発展段階と台湾研究とは，どのように関連しているのでしょう。簡単に言いますと，台湾研究は第三世界の社会発展に関する研究のモデルとして確立していくことが可能です。なぜかといいますと，台湾の社会問題や環境問題は如何に発生したのか，どのように解決していくのかというような問いかけは，第三世界における市民社会の発展にも大きく貢献することになるでしょう。言い換えれば，現在の台湾社会の研究は，世界的なレベルで大きく学問の発展に貢献できるものと思います。

五　日本学者の台湾研究

最後に，日本の学者による台湾研究が持っている意味についてお話ししたいと思います。日本人の学者は，台湾研究の分野ですばらしい業績を残しましたが，日本人の台湾研究と台湾人の台湾研究はやっぱり異なっています。これはアメリカ人の日本研究と日本人の日本研究の違いと同じことです。例えば，アメリカ人の日本研究が近代化理論に傾いていた当時，日本人からは丸山真男による学説が提出されました。したがって，日本人の台湾研究は必ずしも台湾人の視点と一致する必要

がありません。日本人の学者は独自の見方を打ち出してもかまわないと思います。

今日，日本台湾学会の会場はたまたま東京大学の教室を借りて行われていますが，ここに来ると，東京大学の学者たちによる台湾研究の数々の業績が思い出されます。例えば，戦前の矢内原忠雄教授は植民政策研究に従事しながら，『帝国主義下の台湾』という名著を書かれたわけです。また，現職の東京大学総長である蓮実重彦教授は，フランス文学の専門家でありながら，台湾映画にも精通しています。ほかに，台湾研究に従事した日本人の名前を挙げますと，文化人類学者の鹿野忠雄，鳥居龍蔵，馬淵東一，経済学者の川野重任等の方々がいます。しかし，私の知る限り，彼らの業績は日本の学界ではあまり注目されていませんでした。特に，馬淵東一は原住民ブヌン族の家族形態の分析に取り組んでいて，すばらしい業績を残しました。彼は構造主義人類学の研究者として世界的な知名度を持つ学者です。

今日，ここに大変多くの若い研究者が集い，日本台湾学会の設立に参加されました。この場を借りて，私が強調したのは，現在の日本での台湾研究を好ましい方向に変えて，馬淵東一や矢内原忠雄のレベルの研究業績を出してほしいということです。台湾研究に入る皆様はぜひ世界レベルの学者になっていただきたいと願っています。これは私の日本台湾学会設立大会への祝辞であり，期待でもあります。ご静聴どうもありがとうございました。

来聴者の質疑と応答

若林：陳先生、ご講演どうもありがとうございます。先生は台湾における台湾研究の紆余屈折のプロセスを説明なさいまして，最後には，若い研究者が第二の矢内原忠雄になるようにとのお励ましまでいただきました。大変感謝しております。時間の関係でこれからフロアからの質問を一人だけ承りたいと思います。

石丸雅邦（岡山大学大学院院生）：私は原住民運動に興味がありましたので，まず原住民運動の変化について，陳先生にお伺いしたいのです。最近の原住民運動では過去のような全国レベルの盛り上がりが見られなくなったのですが，これは先程陳先生がおっしゃった台湾住民が国家レベルの問題から遠ざけられた現象と関係しているのですか。原住民達も自分の地域生活に関心を持ち始め，市民運動などに参加しているのですか。もう一つの問題は，台湾では，確かに国民国家レベルの問題への関心が薄くなり，市民運動の盛り上がりが見られていますが，台湾は中国と緊張関係にあり，また選挙も頻繁に行われています。こうした社会では，日本と同じように国家レベルの問題に無関心になるということはあり得ないのではないか。台湾はやっぱり独自の道を歩んでいくだろうと思いますが，先生のお考えはいかがでしょうか。

陳其南：二つ目の質問に先にお答えいたします。アリストテレスの話によると，国家はアテネの生活者という市民のために存在しています。国家は決して，アンダーソンの学説のように，想像の共同体であるということではありません。言い換えれば，「中華民族」というような想像の共同体を根拠に中国という近代国民国家をまとめることはよくないことだと思います。このような民族国家の概念では台湾社会の統一独立の問題を解決することができません。市民社会の視点から見ていくと，統一とか独立という国家構想の矛盾点が見えてくるようになると思います。市民社会理念は，想像に依拠した国家構想に有力な反論を加えてくれると考えています。

次に，原住民運動の問題ですが，それも同じような視点から見ることができます。もし原住民運

動を民族国家の理念から考えてしまえば，解決方法が見出せないまま失敗に終わる可能性が高いのです。なぜなら，原住民運動は漢民族の政治運動の影響を受けて，ねじ曲げられて行われているからです。つまり，台湾の原住民運動は，その運動の理念から組織の形態まで多かれ少なかれ漢族の影響を受け，漢族のまねから逃れることができていません。また，台湾の原住民運動は世界や日本の先住民運動と同じように，現状を何とか突破したいと思っても，さまざまな制約を受け，現在まで成功に至りませんでした。民族国家の政治理念を変えなければ，将来も成功の見込みはないと思います。

例えば，蘭嶼の原住民作家の夏曼・藍波安（シャマン・ランポアン，漢族式の名前：施奴来）は，去年台東県の県議員に出馬しようとしました。彼は私が蘭嶼中学校の教師を勤めていた時期の教え子だったものですから，私のところに相談に来ました。私は，ヤミ族の作家はあなたただ一人ですよ，県議員は大勢います，唯一の作家の身分を捨てて，普通の県議員になる必要はないでしょうと説得しました。彼は私の勧告を受け入れ，県議員選挙の出馬を断念しました。結局，予想通りに当選したヤミ族の県議員は漢族を中心とする議会派閥に引っ張られ，自分の能力が発揮できず，身動きが取れなくなってしまいました。このような少数派原住民の処遇問題は人類社会の共通の課題でありまして，決して台湾原住民だけが抱えている特有の課題ではありません。

蘭嶼島の原住民とのかかわりについて説明を加えると，私は大学を卒業した後，一年間ヤミ族居住地に設立されたばかりの蘭嶼中学校で教鞭を執ったわけですが，この第一期の卒業生はいま社会各界で活躍をしています。この前，蘭嶼島核廃棄物の貯蔵問題をめぐって対立した時，彼らの意見は真二つに分かれてしまいましたが，反対派と賛成派，政府役員と反体制運動者のいずれも全部私の教え子です。

会場には，多くの台湾文学研究者がいらっしゃいますので，私がかつて作家の夏曼・藍波安に言ったことを皆様の参考のためにお話したいと思います。私は，作家が選挙に出るのはほとんど創作が行き詰まり，文学作品が書けなくなった時ですよと彼に言いました。私の知るかぎり，多くの台湾作家は選挙に出て，文学の世界へ戻れなくなってしまいました。ご来場の台湾研究者の方々も（私を含めて）選挙に出る必要がないように，研究生活や文筆活動を続けて頑張っていく必要があると思います。

若林：今日の陳先生の講演はここで終了させていただきたいと思います。最後に，松田さんの通訳に改めて感謝の意を表したいと思います。昨日，松田さんは夜遅くまで陳先生と通訳の件を相談なさいました。大変ご苦労様でした。皆様のご参加どうもありがとうございました。